

---

# GoodRack

烏丸。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Good Rack

### 【Nコード】

N5152A

### 【作者名】

烏丸。

### 【あらすじ】

学校に突然閉じ込められた生徒たち。それを襲う何らかの存在。彼らは無事に脱出できるのか。

## 第1話、全ての始まり

朝は昔から苦手だ。でも今はそんなことを言っていられない。今思えば今日は珍しく早く起きたのが悪夢の始まりだった。……。いつもは一時間以上遅く起きるのに今日は目が醒めた。一人で朝食を食べて学校に向かった。いつもは一人だけの道も今は通学時間、人がいっぱいだ。学校に着くなり先生に言われた

「お前が遅刻しないで来るなんて！これは何かおきるな」

嫌みだ。そんなことを聞きながら教室に入る。みんな俺を見て驚いている。気にしないで挨拶する。

「オハヨー巧」

俺の親友

「おつす。信二」

親友だ。大体の友達に挨拶をする。席に座るとチャイムがなると同時に先生が入る

「はーい。席につけよ」

それからはいつもと変わらない日常を過ごして放課後になった。さつさと帰るかな……。その時先生に呼ばれた

「おい！！算お前いつも遅刻してるんだから掃除を手伝え！！」

歯向かっても仕方ない。渋々掃除をしていると部活に行く信二と巧がいた。二人はバスケットを頑張っている。俺も本当なら……。悔しく思いながら掃除にはげむ。気がつくと回りに人気がない。少しサボるか

「だるいなア」

愚痴をこぼす。まだ先生が終わりだと言いに来ない……。もう日が沈む。

「なんで来ないんだよ！！」

職員室に行こう。さすがにこの時間は生徒はいないなあ。職員室にいったが誰もいない……。なぜ！？とにかく先生を探そう。まずは

部活をしてるだろうから体育館に行こう。なぜ誰もいないんだ！？少し恐怖を感じる。行く途中にも会わなかった・・・体育館に着いたが凄く嫌な予感がする。感じたことはないがこれが殺気なのかなあと思った。恐る恐る扉を開く。扉を開いてからより殺気が強くなった感じがする。

## 第2話、出会い

体育館は真っ暗だった。人気はあるが誰がいるかわからない。部活をしているはずだから巧と信二がいるはずだ。

「巧！！信二！！」

携帯の明かりを頼りに体育館に入る。

「誰もいないのか！！？」

返事はない・・・あまり長くいたくない。出口について外に出ようとしたとき突然足音が近づいてくる。振り向くが体育館は暗闇で何もわからないが誰かの足音がする。

「誰だ！！」

体育館に響く。

「算か！！どこにいるんだ」

巧だ。

「こっちだ！！」

携帯の明かりをつける。足音が近づく。

「扉をあけてくれ！！」

言われ急いで扉を開く。勢いよく飛び出した巧は出た所で転倒した。

「はやく、早く閉めろお！！！！」

急いで閉めようとした時中に紅い眼をした何かを見たような・・・扉を閉める。巧に駆け寄る。足から血を流している。

「大丈夫か！？とりあえず保健室に行こう」

肩をくんで歩く。保健室まで巧は何も喋らなかった。廊下にも保健室にもやはり誰もいない。保健室に入り消毒剤と包帯を持って巧を椅子に座らせる。

「少し痛むけど我慢しろよ」

巧は何も言わずに痛みに耐えていた。包帯を巻きながら巧に聞いてみた。

「体育館で何があったんだ？？信二たちはどうした？？」

巧は何も言わなかった。だから黙って包帯を巻いた。巻き終わると同時に巧は深く息をして語り始めた。

「突然だったんだ・・・アイツが来たのは」  
「算は思わず」

「アイツって??」

巧は無視して

「いきなり体育館が真っ暗になって何がなんだからない時に誰かの悲鳴が聞こえたんだ。悲鳴の方向を見たら・・・あの紅い眼のアイツが見えたんだ。次々に悲鳴が聞こえて・・・恐くて何かの物影に隠れたんだ。そうしたら算が来てくれたんだ。」

巧は震えていた。信じれなかった。そんなことが起こるなんて・・・  
ゆっくり息をして立ち上がる。

「歩けるか??とりあえず職員室に行こうぜ」

巧はうなずき歩きだす。

### 第3話、仲間

職員室にはやはり人気がない。何故なんだ・・・仕方ない。学校の外に助けを求めに行こう。下駄箱に行き、扉を開けようとしたが開かない。

「なんであかないんだよ！！巧手伝ってくれ」

二人がかりで必死に力を入れるが開かない。窓も開かない、割ることを出来ない。何故だ！！全てがおかしい。完全に俺達は閉じ込められた。巧は震えている。

「そうだ！！携帯で連絡しよう」

巧も携帯を出し電話をかける。・・・全然かからない。メールも送れない。連絡手段がない。今にも狂いそうな巧を連れて職員室に戻る。人気がある。物音を聞きとつさに隠れる。覗いてみると二人の女子が見える。・・・どうしよう。俺達と同じ状況なら協力するべきだな。職員室に入る。

「きやあつ」

女子が悲鳴あげる。こつちもビツクリする。

「ちよつと、俺達は普通の生徒だよ！！」

女の子は驚いていたけど落ち着いて俺達を見た。状況を聞くとやはり俺達と同じだった。俺達以外にも仲間がいたことは正直嬉しかった。みんなで職員室の椅子に座った。

「まず自己紹介しとくな。俺は筧 かけい はじめ 一二年生だ」

次は巧が

「俺は窪塚 くぼつか たくみ 巧筧と同じ二年だ」

女の子二人は

「私は佐藤 さとう めぐみ 恵一年生です。」

「私は敷島 瑠璃です。（しきしま るり）恵と同じ一年生。」

みんな自己紹介を終わった。もう時間は午後9時だった。こんなに遅くまで学校にいたことはない。

## 第4話、遭遇

四人もいたら少しは安全だ。

「二人とも状況はわかってるよね?？」

二人とも頷く。

「みんなは何か知ってることは伝えて情報を集めよう。俺達が知ってるのは……」

巧が話しをしたことを話した恵と瑠璃は怖がっていた。

「二人は何か知ってる?？」

恵が答える。

「私達は……」

語り始めたとき、廊下の電気が突然消えた。叫びそうになる恵と瑠璃の口を筧と巧はふさぐ。

「しいーっ」

二人は頷く。足音はしないが何かがいる。四人は机に隠れて扉を見つめる。殺気が体を締め付ける。緊張で汗が止まらない。いくら時間が経ったかわからない。ふっと廊下に明かりがつく。緊張の糸が切れて座りこむ。

「なんなんだよー!」

恐怖が体から抜ける。一息ついて恵が話しかけたことを聞く。

「私達は誰もいないから職員室で待ってたんです。そしたら先輩たちが来たんですよ」

情報となるようなことはなかった。ゆっくりしてる暇はないようだ。またアイツが来たら何が起こるかわからない。大変なことが起こるのは何となくわかる。

「さあ、ここから脱出する方法を探さないとな」

何からしていいのかわからないが、とりあえず全ての窓も扉も開かない。絶対に普通のことじゃない。あとは紅い眼のやつが何かもわからない。学校の出来事なんだから少しぐらい資料があるはずだ。



「何か手掛かりがないか探そう。職員室なんだから何かあるだろう。」  
みんなは机の上のプリントや引き出しを開けて探す。大体の所は調べた。あとは校長室だ。四人は校長室に入った。

## 第5話、新たな仲間そして・・・

四人は校長室に入った。暗く嫌な雰囲気だった。電気のスイッチに手をかけたとき何かが動いた。とつさに電気をつけた。

「あぁっ！！」

叫びにも似た声がする。まぶしさにもなれたときその声の主がわかった。同じクラスの渉<sup>わたる</sup>だった

「渉じゃないか！」

渉は暗闇でいたからかまだ光りになれてなく

「誰だっ！！殺さないでくれっ！！」

叫びながら暴れている。

「落ち着け！！俺だ筈だよ！！」

落ち着かせようとする。

「筈！？」

目が慣れたのかみんなを見る。手を貸して立ち上がらせる。

「お前も閉じ込められたのか」

仲間が増えているのは嬉しいがみんな脱出方法を知らない。

「渉、誰か俺達の他に人を見たか？？」

巧が聞いてみた。

「3人ぐらい知らない人を見たよ。」

やっぱり俺達以外にも閉じ込められてる人はいる。探さないと、みんなでいた方がいい。でもどうやって探す！？むやみに歩いても見つかるかもわからないし、アイツに見つかるかも、ならどうする。

「他の人も見つけないと、何かいい方法はないか？？」

みんな考えるがいい案がない。その時、瑠璃が

「校内放送・・・そうだ！校内放送ならどこにも行かないでみんなを集めることができるんじゃない！！」

みんなが納得。放送室は職員室と繋がっている。よし、行こう。筈と瑠璃が出ると校長室が閉まる。

「おい！どうしたんだよ！なんで閉めるんだよ！」  
中から

「知らないよ！開かないよ！！」

必死で扉を引くが開かない。その時、

「先輩！！廊下の電気が！！」

簀が振り向くと廊下は真っ暗だった。

「瑠璃ちゃん逃げるぞ」

手を握って逃げる途中に職員室の電気が消えた。ヤバイ！！音も無く何かが入ってくるのがわかる。瑠璃の手を握って記憶を頼りに走る。

## 第6話、離れ離れ

途中に椅子につまずき転倒する。後ろを振り返ると紅い眼のアイツが後ろから接近している。

「瑠璃、早く行くぞ！」

起きて瑠璃の手を引き走る。

何かの扉についた。

瑠璃を先に入れて、寛が入ろうとしたとき背後に激痛と共に嫌な予感がした。必死で中に入る。扉を閉め瑠璃が鍵を閉める。轟音と共に鉄の扉が変形するが何とか耐えたようだ。何か緊張がとけて電気はついたがまだ職員室に誰がいるのはわかる。瑠璃は寛を見た。背中から血を流し倒れている。血を見て意識をとびそうになりながらも何かをしよう。部屋を見回すと救急箱があった。

「先輩！大丈夫ですか！？」

寛は薄れゆく意識のなかで瑠璃の声を聞く。

「大丈夫じゃないけどまだ死なないよ」

少し冗談を言ったつもりだけど笑えない。

「応急処置が出来そうなんですですね。」

消毒剤とガーゼと包帯を取り出す。

「少し痛みますが我慢してくださいね」

消毒剤のふたを開く。

「もうっ、これ以上痛いことなんてないさ」

消毒剤の冷たさを感じたと同時に予想以上の痛みが背中を襲う。

「ぐっ！ああっ」

激痛に耐えようとするが声が出てしまう。

「頑張ってください、先輩」

励まされても痛みは変わらないのが現実だ。消毒が終わり包帯を巻いてもらう。とりあえず、ゆっくり休むことにしよう。巧たちはどうしてるかな。心配だ。・・・寛と瑠璃と別々になってから何も

出来ない自分達がいた。

「くそっ！！大丈夫か！？？算？？！！」

声は聞こえないが職員室からは何かが倒れる音が響く。生きててくれ。それしか願うことはなかった。扉の外からは金属音が響いた。そとが静かになり嫌な予感がよぎる。

## 第7話、関係と再会

恵が叫ぼうとしたときに巧は口をおさえて

「アイツにバレる」

耳元で言って泣きそうな恵を抱きしめる。職員室の電気がついた。もう出ても大丈夫かな。渉が扉を少し開けて首を出して覗いたとき、電気が消え渉が倒れる。

「大丈夫か!？」

体をひっぱり中に入れると首がなく血が床に広がる。

「きゃあああ!!」

恵が震えながら尻餅をつく。

「くそお!! なんなんだよ!!」

扉をしめて巧は叫ぶ。恵に近づき隣りに座る。恵は震えている。肩を抱き二人よりそう。初めて見る死体に動揺を隠しきれないが今は自分が取り乱したら駄目だと言いつけて恵を抱きしめる。

「大丈夫! 大丈夫だから心配するな! 俺が守ってやる」

恵は泣きながら抱き付く。優しく抱きしめる。さあこれからどうするか。職員室はまだ暗い。算と離れてからいくら時間がたったかわからないがかなり時間が経過したと思う。巧は大丈夫かな。・・・

大分背中中の痛みが無くなってきた。瑠璃は疲れたのか眠っている。

算にもたれて眠る瑠璃の顔は安心してた。算はその顔を見て安心していたら職員室の何かが破壊される音がした。びっくりして飛び起きる瑠璃。算は頭を撫でて

「大丈夫。ここは安全だよ」

瑠璃は算の胸に顔を埋める。

「先輩少し眼閉じてください。」

算は眼を閉じる。唇に柔らかな感覚がした。思わず眼を開くと眼を閉じた瑠璃がいる。キスなんて久しぶりだ。

「瑠璃、俺が絶対に守ってやる」

瑠璃は赤面しながら筧に抱き付く。その時、職員室の電気がついた。やっと合流できる。扉を少し開けて外を確認する。もうアイツはいないようだ。・・・

巧は恵を抱きしめながらいくら時間が流れたかわからないがずっと二人で抱き合っていた。言わずしても二人は心が通い合っていた。その時扉から光りが漏れた。慎重に職員室を覗く。もう何もいない。部屋から恵と共に出ると筧と瑠璃も手をつないで立っていた。

## 第8話、理由

扉が壊れ散らかる職員室でやっと四人は集まった。

「渉はどうしたんだ??」

寛が気付いて問い掛けると巧は下を向いて

「渉は・・・アイツにやられた・・・」

校長室を指差した。扉のしたから真紅の血が床に広がっていた。瑠璃の眼を隠した。憎しみにも恐怖にも似た感情が沸き上がる。一人減った四人でもう誰も死なせないでここから逃げようと決めた。状況は悪くなるばかりだがここで居ても始まらないと思った。放送室行つて人を集めよう。

「ザーッ」

校内にアナウンスが響く。

「んっん！校内に残っている人へみんな力を合わせて脱出しよう」放送をして待つしかない。誰か集まってくれと心から願った。四人で固まつて廊下を見つめていた。

「・・・助けてえ!!」

誰かが走り抜けたと同時に後ろの電気が消えた。またアイツか!!

「逃げるぞ瑠璃！」

「逃げるぞ恵！」

四人は先に走つた奴を追い掛けながら逃げた。学校の中を全力疾走しながら四人はどこかの教室に飛び込んだ。アイツは俺達を追い掛けるに先に行つた奴を追つた。・・・

「やつ！やめろ!!ああああ!!!!」

叫び声とともに床に何かが落ちる音がした。飛び込んだ教室は何かの資料室のようだった。何かはわからなかったがFAXを発見した。そこからは用紙が出たままになっていた。瑠璃が書いてある文章を読んだ。

「もう時間がない。アイツがまた蘇った。これに気付いたもの達よ



早く校内から逃げろ。だつて」

なるほど。学校に先生がいないのがわかる。

「俺達は逃げ遅れたんだ」

誰もいない理由がやったわかった。

## 第9話、決心

みんながない理由がわかってても脱出の方法がわかっていない。ここには重要な資料があると思った。

「ここには絶対に必要な資料があるはずだ。手分けして探すぞ」

以外に狭い教室だから早く捜せそうだ。学校的重要書類が大量にある。なかなか探してるものが見つからない・・・

「ねえ、巧これは？」

本を数冊取った後ろに小さな黒い箱が出てきた。

開けてみると黒いファイルが入っていた。

四人で集まって一緒に見た。

「9月13日、生徒烏丸明美がイジメにより自殺をしようとしたが先生に止められ一命をとりとめる」

「9月20日、烏丸明美は男子生徒たちに体育館で乱暴をされ、自殺をした。」

「12月20日、烏丸明美を乱暴した男子生徒が変死をとげた。」

「1月10日、乱暴やイジメに参加した生徒が全て変死をとげた。」

「2月1日、1月下旬から生徒、教員の間から

「烏丸を見た」

と報告が増えた。

「3月13日、最初の監禁が起こる。犠牲者は13人、警察に調査を依頼すると犯人の指紋は烏丸明美と判明。事件は迷宮入りした」

「4月11日、2回目は起こる前に予告があつた。生徒への連絡が出来ず18人の犠牲者が出た。」

「5月13日、烏丸明美を止める術が見つかった。その方法は体育館に・・・・・・」

「そこはちぎれていた。みんなはかなりショックだった。」

「くそっ！！なんでだよ」

巧が立ち上がり本に八つ当たりした。

「やめて！落ち着こう」

恵が止めた。算は考え事をしていた。

「一???どうしたの??」

瑠璃が問い掛ける。

「体育館に行けば何かわかるかも知れないんだよな。なら行くしかないんじゃないかな」

寛は答えた。でもそれは危険をとまなう事なのはわかってる。

「もつもつといい方法があるよ・・・」

瑠璃は寛の手を握り少し涙ながらに言った。でももう決まっていた。俺がみんなを助けると。巧も寛の言葉を聞いて気持ちは固まった。

## 第10話、別れ、そして

本棚を挟み別々になる二組。

「瑠璃聞いてくれ、俺は君を守ると言ったよな。だから俺はアイツ、烏丸明美を止めるよ。だからここから出たらいつぱい思いで作ろう」

笑顔で言ったが内心不安でたまらない。瑠璃は泣きながら箕に抱き付く。

「一、絶対に生きててね」

瑠璃は箕とキスをした。巧と恵は無言で抱き合っていた。

「恵、俺はここまで人を好きになったことがなかった。でも俺は絶対に恵を失いたくないだから俺は守るよ」

恵は何も言わずに抱きしめた。二人とも決心が固まった。この部屋は安全だと資料に書いていた。だから瑠璃と恵を残して行くことに決めていた。

「巧、行くか」

二人に別れを告げて部屋を出る時に瑠璃と恵はいい言葉が見つからなかったふつと四人の頭に浮かんだ言葉をみんなで同時に言った

「Good R a c k !」

みんなで最後は笑顔で別れた。廊下には何も気配は感じなかった。

「早くいくぞ！行つけば何かわかるはずだ！」

巧は顔を走り出した。廊下は恐ろしく静かだった。体育館までに何も行く事が出来た。体育館の前についた時恐怖で足がすくむ。

！！何かに飛ばされて中に無理矢理入れられた。

「痛って！！なんだ！？」

回りは暗闇で何も見えない。

「箕！！大丈夫か！？」

巧の声がする。

「ああ。大丈夫だ」

声しかわからない孤独感が体を支配する。右も左もわからない状態で何が出来る??わかることは巧が近くにいることそして烏丸明美も近くにいることだった。

「烏丸明美!!いるなら姿を見せろ!!」

勇気をだして叫んだ。紅い眼が突然現れると同時に体育館に明かりがつく。巧はすぐそばで立っていた。ステージの方を見ると一人の髪の長い女子生徒が立っていた。烏丸明美。

「なぜ・・・名前を・・・知ってるの??」

悲しげな声だった。

「学校の資料を見たからだ」

今はなぜか恐怖は感じなかった。

「私は・・・誰も殺すつもりなんてなかった・・・」  
涙がこぼれた。

「ならどうして何十人もの生徒を殺した!!」

巧が聞いた。

「私は・・・呪われている・・・その呪いを・・・解いて」  
言ってる意味がわからない。

「どうすればいいんだ!!??」

巧は聞き続けた。

「私は・・・知らない・・・」

言い終わると回りが暗くなっていく。

「巧、倉庫に逃げるぞ。」

走って倉庫に駆け込む。もうその時は烏丸明美は眼が紅く人ではない感じがした。

## 第11話、調査

倉庫内は道具やマットなどが並ぶ。ここは烏丸明美が自ら命を断った場所だった。扉の前に道具を置きバリケードを作る。

「これからどうするんだよ!!」

巧が最後に跳び箱を置きながら聞いた。

「考える!! 慎重に」

巧はいらいしながら算をみた。算は腕を組みうろろ歩いている。んっ!!これって見てみる!!」

道具の中にあつたと思うジュースが倒れている。こぼれたジュースが床に広がっているのにここだけ一直線に途切れている。近くにはほこりで見えなかったが掴めそうな凹みがある。

「ここに何かあるかもしれない!!」

二人で力をいれ床を開ける。その間も倉庫の扉は破壊されかけている。必死で開くと階段が続いている。階段を算が降りようとしたとき扉が破壊された。もう長くはもたない。巧も降りて床は閉まった。真っ暗だが携帯のあかりを頼りに下る。早くしなければ足元がわからない状態だが急いで下った。やっと階段が終わり広いところに出た。

「烏丸は来てるか??」

「いや、大丈夫だ」

二人とも息が荒い。ゆっくり歩きながら足元を見ると真っ赤な液体が広がっている。血だ。辺りを照らしてみると大量の死体がある。見覚えのある人もあった。そこに!!

「信二!! 信二!!!!」

親友が何も言わずに倒れている。涙が止まらない。でもまだ泣く余裕はない。

「信二!! 絶対に仇をとるからな」

何も言わない信二を残してはしまった。奥には扉があり重たい扉を開

き中に入るとそこには・  
・  
・  
・  
・

## 第12話、解放

そこには見たことのない花が咲いていた。血のような真紅の花だった。

「なんだ！？ここは！！」

ここに何かの秘密があるはずなんだ。後ろの扉が開く。

「私を・・・解放して・・・」

紅い眼ではなく普通の眼だった。

「なら、どうしたらいいんだ！！」

いくら聞いても答えてくれない。冷静になれ何かあるはずだ。烏丸は人を殺すことは望んでいない。なら何故殺すのか。

「烏丸、君の中には他に違う何かがいるのか??」

これしか考えられない。幽霊とか呪いとか全然信じてなかったけど、こんなことは化学的に証明できない。

「私・・・死んだ・・・ときに・・・みんなを・・・怨んだ・・・でも・・・こんな・・・ことしたく・・・ない」

烏丸は涙を流した。

「なにか方法はないのかよ！！」

巧は問い質す。眼が紅くなりはじめた。

「また・・・私じゃ・・・なく・・・なる・・・」

烏丸ではなくなった。

「烏丸の中に潜むお前は誰なんだ！！」

烏丸じゃない存在は

「我、この娘の怨念を喰らう者」

なんなんだよ。正体がわかってても何もできねえよ。紅い眼にのそいつは俺達をじつと見ている。体が動かない。回りを見ると木の棒と割れた硝子が落ちている。やるっきゃない。その時、

「何を！！するのだ！！」

烏丸は頭を抑えて倒れる。



「早く・・・私を・・・殺し・・・て」

そう言い残した紅い眼に変わった。巧を見るとこちらを見て頷いた。硝子の破片を握りしめて走り出す。笥は木の棒を構える。巧は烏丸の心臓に破片を突き刺す。烏丸は巧の腕を掴み

「一人では死なん!!」

巧の腕を片手で握り潰す。

「ぐああ!!ちくしょう!!」巧は破片をさらに突き刺す。もがきながら烏丸は手を離れた。烏丸の背中から何かが出てくる。同時に地震がおこる

「巧!!逃げろぞ!!」

走ってそこから出て扉をしめる。

### 第13話、朝日

扉の奥で崩れる音がした。ここも安全だとは限らない。信二は・・・  
・運んでいる暇はない。いくつもの死体を見ながら走った。階段・・・  
・かなり長い。疲れながら上がる。二人で重たい床の隠し扉を押す。  
先に算が出た。巧が出ようとしたとき足元の階段が崩れる。

「巧！！」

算は巧の腕を掴んだ。

「算！！」

二人とも力が入らない。

「絶対にあきらめるな！！俺は放さないぞ」

算は巧を励ました。巧も力をふりしぼり上がる。やっとの思いで登ってきた。扉をしめようとしたとき、

「ありがとう・・・」

と聞こえたように感じた。烏丸明美が最後にお礼を言ったのだと思う。扉をしめてしつかりと鍵をしめた。二度とアイツを蘇らせないために。血が大量に残る体育館を出て荒れた廊下を通り瑠璃や恵がいる資料室に向かった。扉を開けると同時に二人が飛び出して抱き付く。

「一、一！！やっと、やっと会えた」

涙を流しながら喜ぶ瑠璃。

「俺も会いたかった」

「おかえり、遅すぎよ」

とだけ言っただけ強く抱きしめる恵。

「ただいま、待たせすぎだな」

みんな生き残った。幸せを噛み締めるみんな。大量の犠牲が出てしまったけど俺達は生き残った。烏丸明美も解放してもう恐れることはない。

「さあ、外に出よう。」

廊下をぬけて玄関から外にでる。開かなかった扉を開き外へ……。辺りを光りが包んだ。朝日がのぼってきた。最高に綺麗な朝日だった。

ENDとだけ言って強く抱きしめる恵。みんな生き残った。

「さあ、外に出よう。」

廊下をぬけて玄関から外にでる。開かなかった扉を開き外へ……。辺りを光りが包んだ。朝日がのぼってきた。最高に綺麗な朝日だった。

EN

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5152a/>

---

GoodRack

2010年11月29日07時32分発行